

## ごめんなさい

8月6日、広島に原爆が降下されて65周年の記念式典に、国連の潘事務総長とアメリカのルース駐日大使が出席しました。第一回原水爆禁止世界大会が1961年8月6日に広島で開かれ、1961年に国連総会で核兵器使用禁止決議がされてからでも半世紀が経ちました。核兵器廃絶に向っての広島・長崎の訴えがようやくここまで来たのです。道まだ遠しですね。

川越の近くには丸木位里・俊夫妻の原爆の図が展示されている丸木美術館があります。丸木さんは実家のある広島が新型爆弾で大変な被害にあったと聞き、すぐに駆けつけ、すさまじい廃墟と悲惨な被害者の有様を目の当たりにしました。神奈川に帰ると脳裏に焼きついた地獄のような光景を、絵描きとして画き残さなければと思い、夫婦共同制作で連作の絵を画きました。

そしてそれが人類初めての原子爆弾によると分かった時、原爆の図として仕上げて国内ばかりでなく、世界各地でも展覧会を開いて、原爆の恐ろしさと平和の大切さを訴えたのでした。

アメリカでのことです。「原爆のおかげで日本は早く降伏した。そして大勢の人の命が死なずに済んだのだ」「自分の息子は捕虜になり、戦争が終る直前に広島で殺された」「中国人の画家が日本にやって来て、南京虐殺の絵の展覧会を開いたら、あんた方はどんな気持ちがしますか」等と言われました。

日本に帰ってきて調べてみると、広島師団司令部の地下室に監禁されていた23人のアメリカ空軍の捕虜が、8月6日の数日後に日本軍将校に命令された市民たちによって、竹槍で突き殺されていました。また中国各地では日本兵が市民を無数に虐殺していたことも、分かってきました。南京では30万人余が殺されたと言われています。そういえば在日朝鮮人の死体だけが何時までも広島の河原に野積みになって、からの餌食になっていた有様も、思い出されました。

丸木夫妻は「どうしてこんなにひどいことをしたのだ」という一方的な怨みが、自分たちの心の底にあったことに気付かされ「目からうろこの落ちる思いがした」と語っています。そして「23人の外国人捕虜の図」「からの」「南京」「水俣」「沖縄」と新しい連作の絵を、次々と生み出していったのでした。

東京でアジアの婦人平和会議が開かれた時、各国代表たちがこの丸木美術館を訪れました。丸木俊さんが一枚一枚の絵を説明しながら、「私たちは何という恐ろしいことをしてしまったのでしょうか。これらは私たちのしたことの、ほんの一部なのです。ごめんなさい。本当にごめんなさい」を繰り返しました。

「からす」の絵の前で韓国代表の婦人が突然、俊さんに抱きついて、声を上げて泣き出しました。「日本人の中にこのような絵を画いてくれる人が一人でもいる限り、私たちは日本人と手を組んで、平和のために労することが出来ます」

この様子をじっと見ていたマレーシア代表の婦人が、涙を流しながら俊さんに手を差しのべました。彼女は会議の間中、人を寄せ付けない冷たさを漂わせていた人です。「私も今、私を長い間縛りつけていた怨みから、解き放たれました。有難うございます」彼女は新婚間もない夫を、日本兵の拷問によって、廃人にされていたのです。

「私たちは何という恐ろしいことをしてしまったのでしょうか」  
これは原爆を投下したアメリカ人の言うべき言葉では？ でも大勢の人を殺した戦争を始めたのは、私たちなのです。丸木さんは原爆の凶を通して世界の人々と出会い、「どうしてこんなにひどいことをしたのか」という怨みが、「本当にごめんなさい」に変えられていったのです。そしてその心が、多くの人の怨みと憎しみを溶かして、和解を生み出していったのです。

「いつまで謝り続けるのか」とよく言われます。自分が犯してしまった罪を心に刻みつけて、二度と繰り返さない決意を持ち続けて生きる人から、和解と信頼が生まれ、人と人とは真の友情で結ばれるのではないのでしょうか。

**“神よ、わたしの内に清い心を創造し、  
新しく確かな霊をお授けください” 聖書**